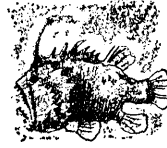


こどもの絵の心理学



ルドルフ・アーンハイム

坂元 昂 要約

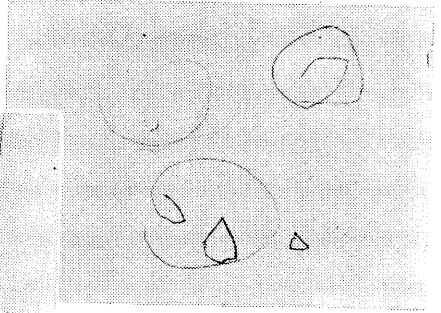
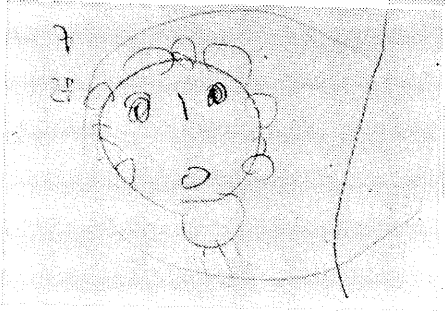
来日中のアーンハイム博士は、芸術心理学の第一人者です。二十代の半ばで、映画心理学上の不朽の名作「芸術としての映画」を著わされて以来、ヴェルトハイマーを師とするゲシュタルト学派のひとりとして、その立場からの芸術研究に一生を捧げていられます。「芸術と視覚形式」表現のゲシュタルト論「ラジオ」など数多くの著書があつて、映画、放送、絵画、美術などの世界で心理学に興味をもつ人なら誰知らぬ人もないほど有名な方です。ナチに追われて、ロンドンからニューヨークへと移された期間に、ひどい苦勞をなされたせいか、人当りが柔かくて、ほんとに気さくな方です。

そのうえ、博士のお話は、とてもおもしろく、また、明解なものです。芸術をただ単に心理学者としての分析的な眼で分解してしま

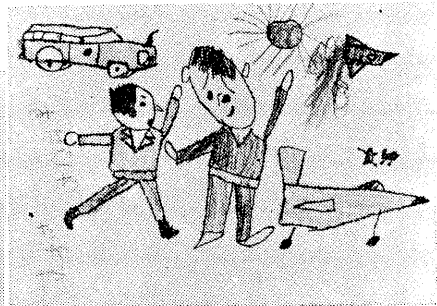
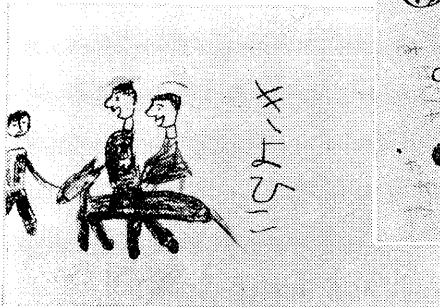
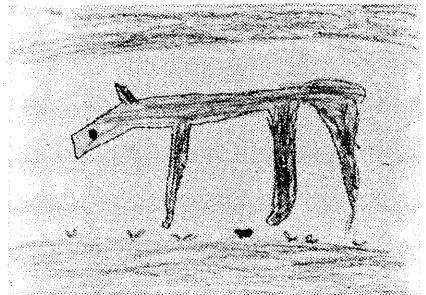
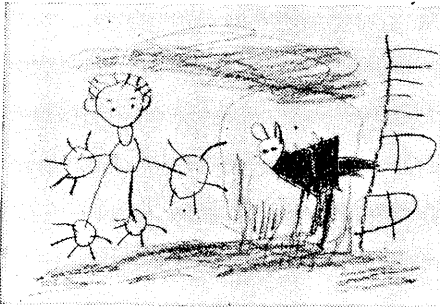
うのではなく、博士自身、芸術史に関する深い知識がそれにうらづけられた芸術家の心をもつて、芸術作品を理解なさっていられます。そのために、博士の所説は、まったく、誰でも耳を傾けざるをえないような生きたものとなっています。

博士は、日本全国を歩いて、芸術心理学の諸問題について、広い知見と深い学識から、有名なお話しを数多くされました。そのすべが、秀れた立派なものでありますが、とくに、ここではこどもの絵に関するものだけでも、日本に紹介したいと思つて、博士におねがいしましたところ、快よく賛同下さり、そのために、特別に日本のこどもの絵から、博士の説を説明するのに適当な絵を選んで下さることもなりました。

<3 才>



<4 才>



<5 才>

さて、ここに数枚の幼稚園児の絵を御紹介しましょう。三歳児の絵、四歳児の絵、五歳児の絵とあります。お茶の水女子大学の付属幼稚園のこどもたちの絵です。かなり選ばれた子が多いせいか、年齢の割には、一般に比べて高い発達段階にあるようです。けれども、やはり、三歳、四歳、五歳と比べると、どこか違っているようです。皆さんは、どんな点が違っているとお考えになりますか。この点については、のちに、博士の説を御紹介しますので、ここでは、博士のこどもの絵の本質についての考えだけを、一言でまとめてみましょう。

博士によれば、こどもの絵は、単なる外界の模写ではなく、複雑な世界を理解しようとするこどもの一生懸命な努力を表わしているのです。その意味でこどもが書く絵は、一枚一枚、世界についての発見であり、解放なのです。したがって、こどもの精神が発達するにともない、世界についてのこどもの解釈も進んでくるわけです。つまり、こどもの絵の発達は、こどもの精神発達に平行していることとなります。

では、これから、数回にわたって、博士がいろいろな場所で下さったお話を、こどもの絵の部分についてだけ要約して、御紹介したいと思います。

八ま え お き

芸術心理学を研究するには、三つの主な領域があります。

まず第一は、知覚の面からするものです。この方法によると、芸術作品の表現力が分析できます。たとえば、この音楽を悲しくしているのは何だろうか、また、この絵をダイナミックにしているのは何だろうか、が分析できるのです。

第二の方法は、社会関係の面からするものです。

芸術は、御承知のように、その生まれ出た社会と密接な関係をもっています。つまり、芸術作品を作る芸術家も人間ですから、社会に生活しています。そこで、彼らの作品である芸術も、その社会と関係をもっているのです。そのため、芸術をその社会との関連において分析することが必要なのです。

第三は、モチベーションの面からするものです。芸術作品を作ること、あるいは芸術作品を鑑賞することは、芸術家やそれを見る人の何らかの要求を満たしているはずですから、芸術作品によって、どんな要求が満たされるかを分析することが大切になります。

実際には、これら三つの領域は、それぞれ独立なものではなく、お互いに深く関係し合っているものなのです。それゆえ、これら三つ

の領域すべてに関係しつつ芸術活動や芸術作品についての分析を続けることによって、はじめて、芸術的創造過程のヒミツを解き明かし、人間の精神の法則性にせまることができるとありましょう。

そもそも、人間の精神発達には、子どもの芸術作品に反映してあらわれてくるものです。ここでは、わたくしは子どもの絵にみられる諸特徴を分析研究することによって、人間精神の発達にせまり、創造過程のヒミツを見つけ出したいと思えます。そのあとで、わたくしのえた考え方に従って、子どもの絵画教育についても論じてみたいものです。

△Ⅰ 子どもの絵▽

子どもの絵は、芸術や精神医学や発達心理学や教育学などのいろいろな方面で大きな関心をもたれています。これは一体どういうことなのでしょう。

近代美術

一九世紀のイタリアの美術史家、コラド・リッチは、一八八七年に「子どもの美術」という本をかきました。これこそ、おそらく、美術というコトバが子どもの絵に使われた最初の本であると思われる。そこで、リッチは、子どもの絵と原始芸術とを比べたのでし

た。ですから、子どもの絵に興味がもたれるようになったのはまだ最近のことで、それ以後せいぜい百年程度しかたっていないのです。それ以前は、絵や彫刻などの美術は自然のほとんど模写みたいなものでした。ところが、子どもの絵は、現実の世界と十分に似ているわけではなく、かなりへだたったものであり、あまりにも単純すぎるものです。そのため、当時は、子どもの絵は、劣等なものだと考えられていました。

ところが、近代美術が抬頭し、セザンヌ、ゴッホ、ゴーガンなどが活躍しはじめますと、様子が変わってきました。この人たちは、秀れた作品を画きましたが、そのなかで、単純さがいかに価値のあるものかを示しました。そして、彼らは、アフリカやメキシコやアメリカインディアンなどの原始美術に、大いに関心をもつようになりました。そのため、近代美術は、原始美術との類似性ばかりか、子どもの絵との類似性ももつようになったのです。

二十世紀の美術、アンリ・ルソーやマルク・シャガール、ジャン・ミロ、の絵もこれを示しています。

このことが、子どもの絵に関心を持たれるようになった理由の一つなのであります。

心理学

もう一つの理由は、心理学の発達であります。心理学者は、絵を

研究した結果、絵はそれを画いた人について何かを教えてくれることに気付きました。いわば、極端に言えば、絵は、それを画いた人のパーソナリティを反映しているのです。そこで、絵は、精神医学的に、患者の心にどんなコンフリクトやおそれや期待や悩みがあるかの診断に役立つことになるわけです。

とくに、有名なフロイドが「人生のはじめの六、七才までに、人のパーソナリティは決まってしまう。」と言って以来、多くの心理学者や精神医学者たちは、こどもの絵をとおして、そのこどもの心の奥底にひそむ問題を探そうとはじめたのです。

いくつか例をあげてみましょう。

日本でも有名なアルシュラーとハトウィックの研究もその一つです。彼女たちは、こどもの絵を分析して、それと描いたこども自身とを比較しました。そして、絵のなかのながこどものパーソナリティに対応しているかを見付けようとなりました。また、幼児画において何が幸福感あるいは抑圧感の絵画的なあらわれであるかを見付けようとなりました。

また、有名な「絵を描くこどもたち」という日本の教育映画のなかに、ひとりの少女が、太陽と花の絵をかいて、それから絵の全体をムラサキ色で塗りつぶすシーンがありました。彼女は、ちょうどその前の体操の時間に、カケッコでビリになり泣いたところだったのです。そこで、このばあいには、ムラサキ色がこのこどもの悲し

い感情をあらわしたのです。

カリフォルニアのある婦人は、兎唇だったので、幼ないときにとても辛い目にありました。彼女がのちに人物の彫刻を作ったとき、その口は、いつも大きなものでした。もちろん、彼女は口を意識して大きくしたわけではありません。ここにも、美術が、それを作った人について何かを教えている一つの例があるのです。

また、あるこどもが「何でもよいから好きな絵を描いてごらん」と言われたとき、お化けのように見える人を描きました。「これはなに？」と尋ねられて、彼は何のためらいもなく「ぼくのお父さんだよ。」と答えました。けれども、彼は無意識的に自分のお父さんがお化けのようにこわい人だと感じていたのかも知れませんが、意図して父をお化けのように描いたわけではありません。もしも、彼が、「君のお父さんはどんな人？」と尋ねられたならば、おそらくは「ぼくのお父さんはとても素敵な人だよ。」と答えたに違いありません。

絵は、このように、それを描いた人の心の奥底を診断するのに役立つばかりではありません。それと同時に、絵を描くことを通して、抑圧された観念や感情が外化し、解放されるという治療的な効果ももっているのです。

ニューヨークの芸術療法の専門家である、マーガレット・ナンバーク女史は、精神病患者を研究して、治療の前後で、患者の描く絵

が違うことに気がつきました。そしていろいろ調べた末、患者の心の奥の、行動によって満たすことのできない無形のを、客観化するためには、絵を描かせることが大いに役立つことを見つけたのでした。

発達心理学

発達心理学にダイナミックな考え方が入ってきたおかげで、こどもの絵の発達段階は、こどもの精神全般の発達段階と対応していることが想定されるようになりました。そこで、こどもの精神発達の法則性を捉えるためにこどもの絵に関心が向けられるようになったのです。

これに影響を与えたのがダーウィンの進化論でした。彼は人間や高等動物・下等動物は、お互いに全く無縁なものではなく、下等から高等へそして人間へと長い長い年月を経て進化してきたものであることを主張して、それまでの伝統的な思考方法をダイナミックな思考方法に変えたのでした。この考え方が発達心理学にも影響を与えました。伝統的な静的な考え方は、こどもの思考はどのようなそれと根本的に異なっているものとされます。ところが、ダーウィンの影響を受けたダイナミックな考え方によりますと、こどもはおとなに成長する、そこで、同じ根本的な行動法則が両者に共通していると考えられるのです。また、静的な考え方は、原始人

と文明人は全く異なった思考をすると考えられます。ところがダイナミックな考え方によりますと、原始人の心性が文明人のそれに発達することになります。

さらに、ヘッケルが、生物学的発達について、個体発生は系統発生をくりかえすと主張しました。これが、心理学に導入されると、こどもからおとなへの発達は、原始人から文明人への発達と同じように生じることになります。たとえば、ピアジェは、こどもの思考は原始人のそれと似ていることを示しました。

このようなダイナミックな考え方は、児童心理学でもう一つ進みました。その結果、こどもの絵の発達段階は、一般に、こどもの精神全般の発達段階と似ていると考えられるようになったのです。たとえば、幼ない子は、まだ、仲間を作って一しょに遊ぶことができません。そのような時期にいるこどもは、絵を描くときも、まだ対象の間の空間関係を表現することができないのです。つまり、芸術活動の発達は、ここでは社会関係の発達と平行しているのです。

教育

幼児画教育、児童画教育においてこどもの絵が関心をもたれるのはあたりまえのことです。しかし、こどもの絵は、もう一つ別の角度から興味の的となってきました。

こどもの絵は、こどものパーソナリティやこどもの世界観を反映

しています。そこで、子どもの描く絵を見れば、その子どもがどの発達段階に達したかがわかるのです。これは一種の精神発達テストなのです。もっとも、これは、自由に統制することができませんので、非公式ではありますが、十分価値のあるものです。

もう一つ、子どもは、絵を描くことによって、現実に対処し、現実には圧倒されずにおとなになっていく力を獲得します。つまり、幼ないときに、すでに現実に対する自分のやり方を学んでいくのです。こうした意味で、子どもの絵は、教育においても深い関心をもたれるようになっていくのです。

博士は、ここでは、芸術心理学を研究するのに三つの領域をあげていられますが、子どもの絵の心理学では、テーマの関係もある上に、ゲシュタルト学派に属されるせいもあってか、知覚心理学に一番重みがかかってくるようです。

また、子どもの絵が、最近世間の注目を集めるようになってきたことについて、博士は、美術、心理、発達、教育などの各領域にその原因を求めていられます。原始美術や近代美術との関連において、また、パーソナリテイの反映として、また、発達段階についてのダイナミックな考え方のおかげとして、さらに、絵を現実にとり組んで問題を解釈する方法として、子どもの絵を捉えられる点、その広い学識と現象に対する鋭い見方に感心させられます。

今回は、いよいよ、本論に入って、子どもの絵の本質に、子どもの絵の発達段階について御紹介することにしましょう。

* * *

アーンハイム博士略歴

一九〇四年 ドイツ生れ

一九二八年 ベルリン大学、博士となる

一九三三年—三八年 国際教育映画協会の出版副編集長

一九三九年—四十年 BBC 海外放送部

一九四三年—

ニューヨーク州、サラ・ローレンス女子大学教授
フルブライト交換教授にて来日

主著「芸術と視覚」一九五七年

「ラジオ」一九三六年

「芸術としての映画」一九三三年

雑誌

Perceptual abstraction and art. Psychol. Rev. 1947, 54, 66-82

The gestalt theory of expression Psychol. Rev. 1949, 56, 156-171

Accident and the necessity of art, J. Aesthetics 1957, 18-31

Function and feeling in psychology and art. Confinita Psychol. 1958, 1, 69-80

* * *